

長岡 あーかいぶす 第 10 号

編集・発行／長岡市立中央図書館文書資料室

<http://www.lib.city.nagaoka.niigata.jp/monjo/index.htm>

文書の虫

～ 寺泊中学校の昭和 ～

平成 20 年 8 月、文書資料室は新潟県立文書館と共催で寺泊地域の歴史資料所在確認調査を行いました。後日、嘉村正規氏から文書資料室へ情報が寄せられ、同年 11 月の補充調査の際、お宅へ訪問調査を行いました。

嘉村氏は、寺泊中学校で昭和 23 年(1948)度から同 34 年度まで教鞭を執りました。その頃の学級日誌、学校新聞や学級通信など、主に学校関係の資料 429 点が文書資料室へ寄贈されました。

学級通信の一例を見てみましょう。昭和 30 年 3 月、嘉村氏が担任を受け持った 1 年 C 組の学級通信「いちしい」。保護者へ宛てた文章にこんな一節があります。「(春休みに) 一日でもいいから日記をつけさせて、見てやって下さい。みんなかける力をもっていますし、おもしろいものをかきますよ」。

嘉村正規資料には、昭和 20 年代後半から昭和 30 年代前半の新潟県内の作文教育についてのさまざまな研究会の資料が多く含まれています。当時の作文教育の熱や、嘉村氏が高い関心を寄せていたことがうかがえます。

先生と、児童・生徒や保護者をつなぐ学級通信。現在の学校の先生方は、学級通信でどんな言葉を語りかけているのでしょうか。

次に新聞部の生徒が作成した学校新聞「あらなみ新聞」を見てみましょう。昭和 26 年から昭和 34 年までのものが綴られています。

昭和 34 年、寺泊町では二度の大火が発生し、5 月に松沢町で 16 戸、9 月に上田町で 42 戸が焼失しました。昭和 34 年 10 月の「あらなみ新聞」にこのような記事があります。



▲学級通信「いちしい」(昭和 30 年 3 月発行)

「私達寺中(寺泊中学校)の生徒の中にこの火事に会った(遭った)不幸な友達がたくさんいるのです。その中でも、特に家の全部焼けた人半分焼けた人を合わせて八人もいました。この中では教科書を無くした人もいます。しかし(家が)焼けた人に愛の手がさしのべられました。それは全校生徒でぼ金(募金)がされてたくさんの金額が集まった事です」。

身近なもののように、案外残りにくいものであるかもしれない学級通信や学校新聞は、学校の出来事はもちろん、当時の地域の歴史や人びとの思いも伝えてくれます。

かつて教員を勤め自身で作成した学級通信等を保管している方、また、子どもの頃に学校からもらったたよりを大切に持っている方もおられると思います。文書資料室は、近現代の学校に関する資料も大切にしたいと思っています。情報をお寄せいただければ幸いです。(小林良子)

災害と文書資料室(6)

被災資料の保存と活用

～山古志地域への返還作業を通して～

山古志地域の被災資料

平成 22 年 9 月 19 日（日）から 21 日（火）までの 3 日間、中越大震災で被災した山古志地域の文書資料の返還作業を行いました。

今回の作業対象は、平成 17 年 5 月 21 日・22 日に旧山古志中学校寄宿舎・山古志民俗資料館から救済した文書資料 272 箱と、震災以降に山古志地域の資料所蔵者から一時保管した文書資料 178 箱です。あわせて 450 箱の文書資料を市役所浦瀬町倉庫から山古志公民館種苧原分館（旧山古志村立種苧原小学校）へ運搬しました。

これらは、文書資料室が一時保管していた山古志地域の被災資料の全てです。種苧原村坂牧家文書（約 50 箱）や旧村役場文書（約 170 箱）などの昭和 52 年から昭和 60 年までの山古志村史編さん事業で目録が作成された資料群とともに、廃棄防止の呼びかけや歴史資料所在確認調査（平成 18 年度実施）の過程で救済された新発見資料も含まれ、地域の歴史の掘り起こしが期待されます。

被災資料とボランティア

1 日目の運搬作業、2 日目・3 日目の返還資料の現状確認作業には、新潟大学の教官や学生、県内の史料保存機関職員などから構成される新潟歴史資料救済ネットワーク（事務局：新潟大学人文学部）を中心に、3 日間で約 100 人のボランティアの皆さんの参加がありました。特に 1 日目の運搬場所がエレベーターのない 2 階スペースということもあり、体力勝負の作業が続き、学生たちの若い力は大きな助けになりました。

●今年度も災害アーカイブ展を開催しました！



▲市内コミュニティセンター資料などを展示



▲旧種苧原小学校（図書室）での作業風景

地域の学び舎に先生と生徒、そして、市民ボランティアの声が飛び交う（9月21日、片桐恒平氏撮影）

作業 3 日目は、一般市民の皆さんに活動の様子を公開しました。また、長岡市資料整理ボランティアの皆さん 8 人も参加。発足から 5 年目を迎えた長岡市資料整理ボランティアの活動も平成 22 年 12 月で、のべ参加者数 1,476 人を数え、文書資料室の心強いサポーターになっています。

返還資料の内容を確認する作業は、来年度以降も続きます。山古志地域の皆さんを含めた幅広い市民の皆さんの関わりが今後も不可欠です。

廃校を活用した史料保存

返還場所である旧種苧原小学校は、平成 13 年 3 月に学校としての長い歴史を閉じました。住民の思い出がたくさん詰まった校舎で、地域の文書資料を保管していくことに、どのような意味を持たせることができるのか。

保存環境の改善も含めて、「現地保存」と「現地活用」を両立させることは大きなテーマです。震災を乗り越えて山古志に「帰村」した被災資料をめぐる様々な課題を、地域の皆さんと協働で考えることで、何らかの解決策を生み出したいと考えています。（田中洋史）

10 月 19 日（火）から 11 月 7 日（日）まで、（社）中越防災安全推進機構と共催で、災害アーカイブ展「中越大震災の記録と記憶」を中央図書館 2 階ホールで開催しました。平成 21 年度に聞き取り調査を実施した市内各コミュニティセンターの「コミセンだより」など、約 40 点の資料を展示。

災害時の対応や、その後の取り組みを物語る記録の数々は、中越大震災から 6 年経った今でも当時の記憶を鮮明に思い出させます。（田中祐子）

小金井良精 1858.12.14-1944.10.16

東京大学医学部名誉教授で解剖学の権威・小金井良精は、安政5年(1858)12月14日、長岡藩士・小金井儀兵衛良達と妻・幸(小林虎三郎の妹)の次男として生まれました。

慶応3年(1867)、藩校崇徳館に学び始めますが、翌4年には戊辰戦争が始まります。戦禍を逃れるため、身重の母に連れられて仙台まで落ち延びた体験を、妻・喜美子(森鷗外の妹で翻訳家・随筆家として活躍)は「戊辰のむかしがたり」としてまとめています。

明治3年(1870)に上京、同5年に大学東校(東大医学部の前身)に入学。首席で卒業した良精は明治13年にドイツへ留学し、ベルリン大学・ストラスブルグ大学で学びます。ストラスブルグ大学では、終生の師と仰ぐワルダイエル先生と出会い、解剖学・胎生学・比較解剖学を専攻しました。

ワルダイエルの指導の下でまとめた研究「網膜生成論」は、網膜の発生過程を調べたものです。動物の胎児の眼球を取り出し、視覚神経細胞の形成を順次に追求、それを各種の動物で比較するという、微細かつ複雑な、気力と集中力を要する研究でした。ワルダイエルに見込まれた良精は彼の助手となり、解剖実習の指導を任せられ、当時のドイツの新聞にも紹介されるまでになりました。

明治18年に帰国、東大医学部講師となり、日本人として初めて解剖学の講義を担当します(それまでは教授のほとんどがドイツ人でした)。翌19年には27歳の若さで東大医学部の教授となります。以来、85歳で亡くなるまで、研究に余念のない日々を過ごしました。

良精の研究の一端を紹介しましょう。

昭和2年(1927)6月20日、「本邦先住民の研究」と題し、御前講演を行いました。この時、昭和天皇27歳、良精69歳。日本各地の貝塚から発掘された人骨をよく観察すると、屈葬・着色・装飾品など、埋葬状態に幾つかの興味ある事実が存在すること。貝塚から出る人骨は、貝よりも下の層から発見されること。また、日本の石器時代の人骨・アイノ(アイヌ)人の人骨・日本人の人骨のそれぞれの特徴を比較すると、石器時代の人骨は日本人よりもアイノ人に近い。他にも考古学上の事実を考慮した上で、アイノ人こそ本邦の先住民族であると述べました。この結論は、良精がお

びただしい数の人骨を計測し比較した結果、得られたものです。

良精の研究とは、常に、事実を基にした具体的思考と研究経過を明確に示しながら、真理を導き出そうとするものでした。研究者としての真摯な姿勢が表れている、医学生への講演文の要約から一部引用します。「研究とは、注目されることの少ない、地味な仕事である。しかし、真理をめざし、思考と実験を反復するなかには、金銭でえられない味がある。また、業績を発表し、海外の学者から反響があると、こんな楽しいことはない。研究の業績は、才能でなく、努力によるところが多い。それだけのことは、必ずある」。この言葉通り、良精は明治期だけで100編を越える論文を発表し、世界へ発信しているのです。

元旦から大学へ出勤し、暖房のない名誉教授室でひとり研究材料の骨を洗う良精。80歳を過ぎても、妻喜美子に付き添われて大学へ通い、研究を続ける良精はいつしか「仙人」と呼ばれるようになりました。そして昭和19年秋、家族が見守る中、良精は安らかに息を引き取ります。その遺体は剖検(医学のための献体)のため、70余年通った東大赤門をくぐりました。こうして、解剖家としての最後の責務を果たしたのです。

(桜井奈穂子)

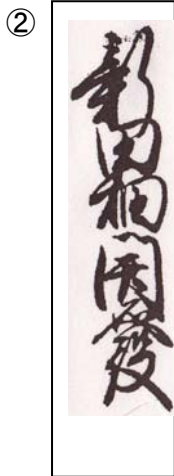
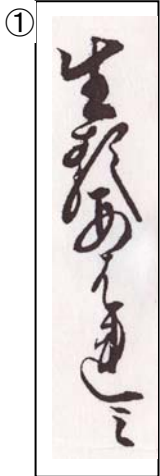
【参考文献】○星新一『祖父・小金井良精の記』河出書房新社 昭和49年 ○『ふるさと長岡の人びと』平成10年 他

●所蔵資料を展示しています！

昨年12月、2階閲覧室入口に展示ケースを設置しました。スタッフおすすめの所蔵資料を順次展示していく予定です。現在は、『NIC長岡通信 そいがあて』誌上で紹介した小金井良精資料を展示。新収蔵資料の速報コーナーとしても活用していきます。時を重ねて現代へ伝わった文書資料の実物の風合いには、何ともいえない説得力があります。互尊文庫へお越しの際は、展示ケースを是非ご覧下さい。

(田中洋史)





安禅寺文書「御用記條簡」より
ヒント ①は徳川綱吉の時代に出された法令、②は徳川吉宗の時代に出された法令です。

古文書クイズ十
 ちよっと一息

古文書の読みと住所・氏名・電話番号を、葉書・FAX・メールで文書資料室へお送り下さい。平成23年4月1日必着です。全問正解者の中から抽選で5名の方に粗品を差し上げます。

【前回の答え】①長岡本城再築 ②長岡藩中江歳末之祝儀

《新たに公開した所蔵資料一覧》

- ※寄贈・寄託・購入順。保管場所の都合で当日閲覧できない資料もあります。
- ・山本町森家資料（現代、9点、瀬尾奈津子氏寄贈）
- ・嘉村正規資料（近代・現代、429点、寺泊中学校関係資料等、嘉村正規氏寄贈）
- ・北越新報（近代、2点、石澤紀雄氏寄贈）
- ・刈羽郡桐沢村青柳家文書（追加）（近代・現代、62点、青柳拓氏寄贈）
- ・三島郡三島町上岩井安達家文書（追加）（現代、23点、安達香氏寄贈）
- ・坂之上町西山家資料（近代、68点、西山幹雄氏寄贈）

●史料保存こぼればなし(3)

和紙は丈夫で長持ちです。しかし、それは保存状態がよければの話。保存が悪ければ、カビが生え虫が食べ資料はボロボロになってしまいます。

文書資料室では、大切な歴史資料を守るために燻蒸処理を行っています。燻蒸処理とは、特殊な薬品を用いてガス燻蒸を行い、殺カビ・殺虫処理をすることです。残念ながら予算に限りがあるので、保存状態をみながら、少しずつ行っています。

ただこれは、あくまでも資料保存の始まりでしかありません。湿度管理や防虫剤の投入など、普段の気配りが大切です。(石井順子)

●歴史公文書の整理を行っています

今年度の歴史公文書整理を越路支所で実施しています。文書を紐で綴り直した後、さびてしまうホチキス等を除去しています。取り外したファイルに囲まれながら作業を行っています。(和田 彩)



《編集後記》▽昨年10月に、渡邊勝明臨時職員が退職し、和田彩臨時職員がスタッフに加わりました。▽私が勤め始めた同じ年に創刊された「長岡あーかいぶす」も今号で10号です。毎号頭を悩ませながら書いていますが、出来上がった時は成長した気持ちになります。これからも歴史資料を通じて、心に届く何かを伝えていけたらと思います。(小林良子) ▽本紙のバックナンバーは文書資料室のホームページで読むことができます。歴代スタッフの苦心の跡をぜひご覧下さい。▽毎年発行の長岡市史双書は、今年度で50冊目を迎え、安禅寺御用記を翻刻します。▽文書資料室がある互尊文庫は、大学受験の勉強でほぼ毎日通った場所です。学習室の賑わいを見ていると初心を思い出し、史料保存の業務にも熱が入ります。(田中洋史)

平成23年2月1日発行
 編集・発行：長岡市立中央図書館文書資料室
 スタッフ：石井順子、田中洋史、小林良子、桜井奈穂子
 田中祐子、和田 彩
 〒940-0065 新潟県長岡市坂之上町 3-1-20
 (長岡市立互尊文庫2階)
 TEL0258-36-7832、Fax0258-37-3754
 E-mail：monjo@nct9.ne.jp